



特集

法人化と開学30周年

- ・学長ヘインタビュー
- ・30周年記念事業について
- ・父母懇談会 続報
- ・30周年募金のお願い

新潟県中越地震から一年

- ・本学への支援等について
- ・一年の活動とこれから

CONTENTS

- 2 NEWS
- 4 特集1-法人化と開学30周年-
- 8 特集2-新潟県中越地震から一年-
- 10 学生活動
- 12 新潟日報文化賞
- 13 COE報告
- 14 就職コーナー
- 15 トピックス
- 16 にいがたみてある記 / 編集後記



グアナファト大学での 国際学術フェアに参加して

小林 高臣
(化学系 助教授)



グアナファトは、メキシコ中央部の高原地帯に位置し、人口が約14万の世界遺産で有名な風光明媚な町である。州都、グアナファトにある当大学の歴史は古く、特にスペイン語を学びたい多くの学生を諸外国から受け入れている。このフェアは第6回目になり、今年は、10月21、22日に、経済学部で開催された。特に今年度は、カナダケベック大学との交流が25周年目に当たり、そのセレモニーも併せて実施された。アメリカ(ルイジアナ大、ウエストバージニア大など)、日本(創価大学、滋賀大学)のほか、ドイツ、イギリス等の大学、奨学会などの18ブースが設置され、9時 - 14時の間に、学生が興味のあるブースを個別に訪れ、留学情報、方法、可能性等を色々聞いて回れるようになっていた。工学系大学は本学だけの参加となり、工学分野で留学したい学生が大変多く訪れた。2日間で、アンケート記帳者は185名(未記帳者もほぼ同数)に上り、学部、修士から近在の高校生まで訪れ、技術立国日本への興



美しいグアナファトの町並(中央の白い建物がグアナファト大学)

味が相当なものである事を肌で感じた。本学のブースは、小生と坂牧里和さん(留学生支援係)のコンビでこれら学生の対応に追われたが、それでも手が足りず、日本語学科の美濃先生、Fujimoto先生、工学部の杉田先生にお手伝いいただいた。我々のブースに訪れた学生は皆、意欲的であり、彼らに、日本や本学の教育、研究を紹介し啓蒙できただけでも、このフェアに参加した意義は大きいと感じている。これを機に、今後、グアナファト - 技大の教育、研究連携がより大きく進展することを願っている。



技大のブースにて

スピーチコンテストに参加して

張 莉(中国出身)
(経営情報システム工学専攻1年)



長岡技術大学院工学研究科修士課程一年生張莉と申します。学校に入って何でも新鮮を感じる私は、学校で体験したことを題材にして、むつみ会により開催された第17回外国人日本語スピーチコンテストに参加し、ソロプチミスト賞を受賞しました。何年も賞状を頂くことのなかった私にとってはとても嬉しいことです。

学校に来る前に、私なりに日本の文化や生活などについていろいろ勉強して、もう慣れたと思いましたが、実際に来てみたら、微妙に違うことに気づきました。特に、日本の大学生はちょっと違いますね。

例えば日本の大学生はあまり勉強に興味がないようで、学業よりもアルバイトを熱心にする事、授業中に

あまり質問しないこと、反応がないことなどが気になりますね。

今の教育現場と制度からは、最終的にどの段階で学校を卒業したかということが、その人の社会における地位を決める大きな要因になっています。そのため、学業を基にした、自分の内面を見据えた将来のことを忘れない事は重要です。時間はあっという間に過ぎるので、大切に使いましょう。



JABEEって何だ？

建設工学課程プログラム責任者
杉本光隆
(環境・建設系 教授)



JABEE (日本技術者教育認定機構) って何だ？

「技術者教育プログラムの国際的な同等性を確保するとともに、技術者教育の向上と国際的に通用する技術者の育成を通じて社会と産業の発展に寄与すること」を目的として、1999年に設立された民間組織で、具体的には、「統一の基準に基づいて高等教育機関における技術者教育プログラムの認定」を行っています。

メリットは？

認定されたプログラムの修了者には、国家資格である技術士の1次試験免除、JABEEが2005年6月にワシントン協定(WA)に正式加盟したことにより、2005年度修了者から、加

盟国で、その国の認定プログラム修了者と同様な特典が与えられる、といったメリットがあります。

どうやると認定されるの？

書類審査：提出した自己点検書を元に、審査の準備が行われます。多民族故に、性悪説を前提とする社会システムを採る欧米がWAを創設したことから、提出する自己点検書や実地審査で求められる証拠資料の厚さの合計は10m (cmではありません) を超えます。

実地審査：複数の審査員が来学し、自己点検書を元に、その証拠資料を調査し、認定の可否が判断されます。調査には、教員・OB・学生面談や、皆さんの自己達成度評価・レポート・答案等の提出物の点検等が含まれます。

建設工学課程は？

全教員が一丸となって準備作業に取り組み、10月23日に亘り中間審査の実施審査を受け、高い評価を得ることができました。現在は、最終審査結果を待っている状態です。

JABEE実地審査を受審して

電気電子情報工学課程プログラム責任者
高田雅介
(電気系長 教授)



電気系では、本年10月19-21日にJABEE実地審査を受けました。実地審査までの2年近く(準備期間を入れますと4年近く)、電気系全教職員が電気電子情報工学課程の教育プログラムに所属し、カリキュラムやシラバスの適正化、継続的な教育プログラムの改善システムの運営、学習教育目標の定量的な達成方法模索等に丸となって取り組み、受審に備えてきました。審査の結果、教育点検システムとその改善活動状況については高く評価されました。また、実務訓練先企業の責任者を通じて、本プログラム生の教育程度を評価してもらう「外部評価システム」についても実務訓練生受け入れ企業の方々の多くのご協力もあり、本学の技術者教育におけるユニークな教育システムとして大いに賞賛されました。受審当日には教員・技術職員・事務職員・学生・卒業生の面談、及び授業視察なども殆ど問題なく、無事終了しました。この紙面を借りまして、関係諸氏に深く感謝いたします。

このたびの受審では、電気電子情報工学課程内での問題については大きな指摘はなかったものの、学習・教育目標の設定、ならびに第3学年編入前学習履歴に関しては我々の予想以上に厳しい評価結果となりました。特に、全学の対応が必要とされる編入生についての単位認定法(実績ではなく保証する方法)、及び高専での履修科目の(本プログラムの学習・教育目標に対する)達成度評価方法について、学則やカリキュラムを改善してJABEE基準に合わせるように強く求められました。第3学年編入生の単位認定の問題は、高専との連携大学としての本学の根幹に関わる問題であり、審査員からのご指摘を大変重く受け止めています。今後は、高専の先生方、教育プログラムに参加している学生諸君や卒業生の皆さん、実務訓練先企業等外部の方々等のご意見を参考にさせて頂き、大学院教育との連携も睨みながら全学的な議論を高めていきたいと考えています。

最後になりましたが、このたびの受審を通じて、我々の教育プログラムを見直す非常にいい機会となりました。今後とも高専の連携大学に相応しい教育システムの構築に努力していきたいと思っております。

法人化と開学30周年

来年10月1日に開学30周年を迎える本学の歩みと国立大学法人化について、小島陽学長にお話をうかがいました。

聞き手 若林 敦（語学センター助教授・VOS専門部長）

小島学長ご自身が本学で教員として過ごされた期間は、本学30年の歩みとほぼ重なるわけですが、その30年間を振り返って特に印象深く思い出される出来事を、最初にくっつかおうかがいできますでしょうか。

私は昭和55（1980）年にここに来ました。その最初に来た年の冬が大雪で、38豪雪の後の56豪雪です。これにはもう驚いたというか、12月に入ってから、雪が止まないんです。全然。ショックでした（笑）経験がなかったですから。その後も何度か大雪の年があり、今年もそうでしたが、それでも昔に比べれば雪が少なくなって、楽になりましたね。

それと昨年の中越地震。危機管理の重要性を再認識しました。雪とは違って、地震は全く予想もしていなかったですから。学生の安否確認一つとっても体制がなかった。でも、地震直後からの対応では、事務局を含めて大学が一体化できた力を合わせて、非常事態に対処していった。これは強く感じました。ありがたかったのは、他大学からの支援ですね。地震直後にトラックに救援物資を積んで駆け付けてくれたところもあった。また、被害の大きかった長岡高专への援助ができたのはよかったです。

教育・研究についてはいかがですか。

個人的なことでは、1993年の11月25日『日本工業新聞』に「世界初の「水に浮く合金」として我々の研究室で作ったマグネシウム・リチウム合金が報道され、これがマグネシウムの見直しにつながった。それまではアルミが軽いとされていた、それより先、マグネシウムは軽い。では自動車に使うとか、いろんなところで使うようになりました。ノートパソコンやデジカメの筐体にもマグネシウム合金を使っています。プラスチックなどに比べたら、金属材料ですから丈夫だし、リサイクルもできますから。

大学の取り組みでは、21世紀COEプログラムでしょうか。初年（平成14（2002）年）度にまず一つ採択されましたが、「ハイブリッド超機能材料創成と国際拠点形成」これはかなり必死になって準備しました。この大学で世界水準の研究をやっているということを示せるかどうかがかかっていましたから、本学の総

力を挙げて準備をしましたね。

この30年間の一番大きな変化として、昨年4月の国立大学法人化がありました。この新制度のもとで、これから本学をどのように発展させていこうとお考えでしょうか。

これからは大学がどんどん大きくなっていくという時代ではない、量から質への変化が求められていると思います。本学は来年度、生物統合工学専攻（博士後期課程）を新設します。学生定員は増えますが、教員は増えない。学内組織の改編で行ないます。これまでの学問分野を見直し、学生定員の再配分や教員の再配置など、時代に要求されている分野を大学が自ら開拓し、自己変革を遂げていく。法人化の求めている自主性の発揮とは、一つにはそのようなことだと考えています。また、本学は工学部として、やはり研究に重点を置く大学院大学の性格を持つべきでしょう。そのために、博士課程と助手・研究スタッフの充実を図らなければならない。例えば、現在の教授：助教授：助手＝1：1：0.5（人）といった配置を1：1：1あるいは1：1：2にしていくことも考えられます。当然、教員定員や人件費配分の見直しも伴うことになると思います。



教育面ではいかがですか。

30年前の本学設立時の理念は時代を先取りしたものでした。実践的・創造的な指導的技術者の養成を目指して教育制度の中に長期の実務訓練(インターンシップ)を組み込み、学部・大学院修士一貫教育を行なう。教育・研究面で産学連携を積極的に推進する。今日では社会的要請となっているこれらのことを本学では30年前から実施してきた。このシステムは学生の教育面でも着実に効果を上げてきました。この特色を法人化もいっそう充実させるべきだと考えています。

例えば現在全学的にJABEE(技術者教育認定機構)の受審に積極的に取り組んでいますが、その中でこれまでの教育の見直しを行っています。現在の学生の具体的な状況に合わせたカリキュラムの整備や学力向上策など教育システムの大枠を堅持しながら、それにふさわしく学生の力を伸ばして行くためのきめ細かな取り組みに、各課程でも大学全体としても着手し始めています。

学長はよく「活性化」ということを口にされますね。

そうですね。本学のような小さな大学が総合大学のような大きな大学と互角に競っていくためには、全教職員に持てる力を十分発揮してもらわなければなりません。そのためには、各人がこの大学で果たすべき役割を認識し、その自分の持ち場で頑張る。大学はその努力や成果を正当に評価していく。そのようにして教育・研究活動をはじめ国際交流や産学連携、高専との連携、社会貢献など、本学が社会で果たすべき様々な活動全体の前進をはかっていきたいと思っています。

今後のそのような本学のあり方を展望して、学長ご自身の経験もふまえて、本学教員にこれからどういふことを期待なさいますか。

あまりにも保守的に、それまで自分の習ったものをずっと持っているという時代ではもうない。例えば工学での自分の研究が人間の(人体の)何かに応用できないかというふうに、自らの分野を積極的に広げていくことが必要だと思います。工学博士なんかの一つの欠点はやはり分野が狭すぎるということです。だから特に若い人は幅広く興味を持たなくちゃいけない。私は助手を長くしていたから、その時にいろんなことをやりました。それがよかったと思っています。

個人的なことですが、私は本学に来て二年後に、英国のケンブリッジ大学に在外研究員として行かせてもらいました。延長をお願いして1年10か月、家族と



滞りましたが、これがとても刺激になりました。研究を進めるといったこと以上に日本ではできない経験、こういう世界があるのかという驚きがたくさんあった。若い時にはぜひそんなふうに見聞も広げてほしい。実はこの制度が去年からなくなりました。国でやらないのなら、大学として何か考えなくちゃならないと思っています。

学生に対しては、どのようなことを期待されますか。

高校や高専と大学とは明らかに違います。与えられたものを解決するだけではない。自分から問題提起までできるような自主的・積極的な人になってほしいというのが一番です。それからやはり学生時代は人間形成にとって大事な時期です。真っ直ぐな人、裏表のない人に信用されるような人物になってほしい。本学の学生はそういう資質を持っていると私は見ています。ですから大学として教育面ではそういうことにも力を注いでいきたい。

そしてやはり「継続は力なり」です。私もこれまで学生、教員をはじめいろんな人を見てきましたが、何事かをなす人は続けてますよね。努力を。スポーツ選手でもイチローなんかを見ればよくわかると思います。

最後に、来年の30周年をどのように迎えますか。

本学の大きな節目だと思います。法人化を経て、次の段階に飛躍していく。そのために、これまでの歩みを振り返って、今後の本学の姿を描き出し、内外に示していかないとはいけません。日本社会全体が大きな変化の渦中にある時代に、本学も開学以来の使命を時代にふさわしく果たしていけるようにしたいと思っています。

本学は今後も特色ある大学としての発展を期しています。学生の親御さん方をはじめ、学外から本学を見守っていて下さる方々には、ぜひこれまでにもまして、本学へのご支援をお願いいたします。

(2005.10.20)

新たなステップに向けて

理事・副学長

丸山久一

1世代は30年と言われています。新たに興り、成長し、次に譲り渡す期間が30年ということで、このサイクルで歴史が刻まれてきたと思います。昨今では、期間が短くなっているかもしれませんが、本学も、来年、開学30周年を迎えます。

この30年間について、工業高等専門学校をはじめとする本学を取り巻く環境および本学の状況を振り返ってみますと、やはり1世代という時代の変遷を感じます。勿論、歴史は継続されていますが、次の30年を新たにスタートする目的で、開学30周年記念事業を計画しました。

記念事業の背景には、国立大学が法人になったことも大きく反映しています。大学は、それぞれの将来構想をたて、自分の責任の下で施策を進めて行くことになりました。そこで、次世代の本学の活動を支える基礎として、記念事業の中に2本の柱を立てました。博士課程の学生や留学生の住環境整備のために新たな宿舎（同窓会室も含む）を建設することと、学生の勉学支援のために本学独自の奨学金制度を設立することです。

この事業の推進のためには、大きな資金が必要となります。そこで、本学の教職員からの募金をはじめとして、同窓生、地域の関係者、元教職員、さらには、本学を支援して頂いている関係各企業にも募金をお願いすることとしました。目標総額は5億円です。内訳として、宿舎の建設費として3億円～3億5千万円、奨学金制度に1億円、残りの5千万円は、式典や記念講演、30年誌、記念論文集、タイムカプセル、留学生フェア、技大祭等の諸事業に当てる予定です。

開学記念日は10月1日ですので、式典や講演等の事業はこの日を中心に計画しています。記念講演は、ノーベル化学賞受賞者の白川英樹先生にお願いしています。さらに、例年では9月中旬に開催している技大祭もこの事業の一環とし、9月30日および10月1日に行います。例年以上に工夫を凝らし、本学学生、教職員、地域の人々だけでなく、この機会に集まる同窓生にも参加してもらえるものを考えています。勿論、同窓生同士が交流を暖める事業もあります。社会の第一線で活躍中の同窓生による講演会や懇談会、フットサル大会等です。

これらの事業を有機的に進めるために、小島学長を委員長とした実行委員会が活動しています。6部会を設置し、役員を部会長として準備が着々と進められています。この30周年事業を成功させるためには、教職員のみならず、学生、同窓生の積極的な参加・協力が必要です。一丸となって、新たな世代の幕開けをしたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

開学30周年記念事業

実践的・創造的能力を備えた

長岡技術科学大学では、開学以来30年間、創設の趣旨を堅持しつつ、大学を取り巻く社会・経済の急激な変化に呼応して、学問と技術の両面における新たな知識情報の創出と応用の展開を進め、「実践的・創造的能力を備えた指導的技術者の養成」を図り、教育・研究活動を充実するとともに、産業界との連携強化に取り組んできました。

来る30周年を期して、次の時代に向けての発展と更なる社会貢献の推進に向け一つの区切りとなるよう、次の様々な記念事業を企画しております。

1. 開学30周年記念事業

- ・ 記念式典
- ・ 長岡技術科学大学特別奨学金制度（仮称）の創設
- ・ 開学30周年記念国際交流会館（仮称）の建設
- ・ 記念誌の発行（30周年記念誌の刊行）
- ・ 学術講演会等（講演会、公開講座、学術交流会）の開催
- ・ 国際シンポジウム等の開催（COE、海外交流協定大学）
- ・ 展示会、産学官交流会の開催
- ・ 技大祭の充実（ロボコン大会、研究室公開）
- ・ タイムカプセルの設置（懸賞論文募集 等）



父母懇談会 続報

ご両親は大学を知りたがっています。

- 第1回父母懇談会を終えて -

岡崎 正和
(機械系 教授)



第1回の父母懇談会を、平成17年7月31日(日)に開催致しました。同懇談会は、『まずは父兄に長岡技術科学大学を知ってもらうことから地固め』することを意図して、小島学長の発案により実行したものです。本学の学生出身・出身地の多種多様性を考え、より多くの父兄の参加を頂けるように、そしてまた、懇談会の後には『親子水入らずの大花火大会』が観れるように、日曜日の7月31日に設定致しました。懇談の内容は、1)就学上の話題、2)就職上の話題、3)大学生活全般の話題、と致しました。実行状況につきましては、VOS 129号に記載した通りです。

さて、以下、同懇談会の内容を立案、実行に移した立場からの感想です。まず、上記の3つの話題に共通して、『うちの子どうしてますか？ 大学には何時に行っていますか？ 研究室で何するのですか？ (就職先等について)うちの子どう言っていますか？

皆について行っているのかどうか心配で』、の類の質問やコメントが極めて多かったことです。ほとんどの学制諸君は、『何を今さら聞いているの!』『もう大人だから!今さら親に!子供ではあるまいし!』などとコメントするでしょう。でも、学生諸君、および教員のみなさん、むしろ、逆です。ご両親は大

学のこと知りたがっています。『大人だから、大人同士で、もっと多くの対話と情報伝達』をして欲しいと思います。今、試験、就職、生活上の問題を抱えているのであるならば、問題解決は、その辺から始まるのではないですか。

なお、父母懇談会の具体的懇談内容、父母および大学面談教員から寄せられたアンケートの内容につきましては、近い将来、VOSに記載する予定です。



司会を務める岡崎教授

募金ご協力をお願い

指導的技術者の養成のために

皆様方には、「長岡技術科学大学特別奨学金制度(仮称)」の創設及び「開学30周年記念国際交流会館(仮称)」の建設の2つのプロジェクトを中心に格別なご支援を賜りたく、何卒、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

2. 募金目標額 5億円(個人・法人募金総額)
3. 募金期間 平成17年6月1日から平成18年9月30日まで
4. 寄附金額種別 個人 一口1万円(但し、金額の多寡にかかわらずありがたくお受けいたします。)
法人等 一口の金額は特に定めません。
5. 寄附金に対する課税所得控除 個人、法人等とも課税所得の控除が受けられます。
6. 寄付者の顕彰 ご寄附を賜りました金額により、感謝状の贈呈、タイムカプセル設置記念碑にご芳名を掲載し顕彰させていただきます。

寄附金のお申し込み、お問い合わせなどは「開学30周年記念事業実行委員会」へお願いします。

〒940-2188 新潟県長岡市上富岡町1603-1
長岡技術科学大学総務部総務課
TEL 0258-47-9201, 9203

特集2

中越地震に係る本学への支援等について

早いもので新潟県中越地震から一年が経過しました。本学でも建物・物品等に多大な被害を受けましたが、皆様からの温かいご支援等により、着実に復興に向けて前進しております。ここに関係各位へご支援のお礼と受入状況、用途等についてご報告をいたします。



学外に搬出した被害物品等

文部科学省からの災害復旧費

予算項目	予算額 (千円)	主な用途
運営費交付金 (備品分)	485,477	イオンビーム発生装置(ETIGO-)修理, 衝撃電圧発生装置(ETIGO-)修理, 静電加速器修理, 超伝導NMR その他精密機器類, 計測機などの修理等223点
施設整備費補助金 (建物・工作物関係)	104,904	テニスコート他災害復旧工事, 市水主受水槽入替工事, エキスパンションジョイント災害復旧工事, 実験廃液処理施設災害復旧工事, その他災害復旧のための工事13件

支援物資受入状況並びに見舞金・義援金の受入状況及び用途

(平成17年11月1日)

1. 支援物資受入状況		
支援機関等	大学, 高専, 企業, 団体, 個人(23機関等)	
主な物資	水, おにぎり, カップ麺, 医薬品, カセットコンロ, カセットボンベ, 毛布等	
2. 見舞金・義援金の受入状況及び用途		
支援機関等	大学, 高専, 高校, 企業, 団体, 個人, 学内教職員等(300機関等)	
受入総額	9,373,622円(学外から受入 7,673,758円, 学内募金等 1,699,864円)	
使 途	学内学生被災者等への見舞金(全壊9, 大規模半壊2, 半壊8, 一部損壊40, アパート等の引越し者10, 怪我人2)	5,690,000円
	長岡高専学生被災者等への見舞金	543,237円
	地震対応物品等購入(宿泊施設用布団, ブルーシート, 懐中電灯, 電池等)	524,761円
	用途指定事項等(図書館整備, ボランティア活動等)	2,615,624円



ラグビー場の地割れ



敷地南側のブロック塀倒壊



屋内プール脇の舗装陥没



新潟県中越地震から一年

一年間の活動とこれから

スノーパトロールから復興の種まきへ

上村 靖司 (機械系 講師)

世界有数の豪雪地で起きた冬直前の大震災。震災に冬備えを剥ぎ取られて丸裸で放り出されれば、間違いなく凍えてしまうという心配をしていました。「今冬は暖冬小雪」という気象庁の長期予報・カマキリの予測が当たることを祈っていました。結果は19年ぶりの豪雪。1月10日前後と1月末の2回、24時間で1m近く降るという記録的な豪雪となりました。



スノーパトロール

不安な冬に突入した被災地に、研究者としてできることはないだろうか。何ができるか、何をすべきか。目的も計画も具体的に立たないまま「とにかく地震後の特別な冬を現場で体験しなければならぬ」という思いに突き動かされて、スノーパトロール隊を結成。大学

の支援も得て、大学院生10名とともに、週1~2回の被災地巡回をはじめました。とはいえ、素人集団に出来ることと言えば住民の話を聞くことくらい。それでも、被災住民は、若い学生が定期的に話を聞きに来てくれることを喜んでくれました。対話の中で「あの斜面は怖い」と聞いていたその場所で、3月19日に雪崩発生。住民自身による防災パトロールの可能性を感じさせる出来事もありました。



本震震度検査ハイキングにて(筆者は中央)

さて、震災から一周年を迎えました。「復旧は期限付き、復興は永遠」です。本稿が掲載されるころには、終わっているはずですが、「復興の種まき」イベント“05かわぐち体験防災キャンプ”の準備に奔走しています。震度7の経験を風化させずに活かす体験型の防災キャンプです。10年後、地域が「震災のおかげで」、と振り返ることのできるよう、もてる限りの知識と経験とアイデアと情熱を中越復興に役立てて生きたいと考えています。

技大のボランティア活動とこれから

木村 悟 隆 (生物系 助教授)



中越地震後の初期のボランティア活動については、VOS124号に触れたが、その後も様々な技大生の活動があった。昨年末の青葉台小学校でのクリスマス会(山古志と青葉台の子供の交流を意図。福島大学震災ボランティアが企画)、2月豪雪後の操車場仮設の雪かき(IVUSA国際ボランティア学生協会が主体)、6月の小千谷市塩谷地区の片付け、8月の避難勧告が解除されたばかりの旧山古志村での片付けへの参加が主なものである。この中には、県内外の学生及び社会人のボランティアと合同の活動もあり、参加者同士の交流の場となった。また、経験豊かな学生災害ボランティア(IVUSA)の組織化された活動を観ることも出来た。一連の活動の中から、学生ボランティアのネットワーク化の動きも始まるようとしている(USVネットワーク(福島大学で11月に技大生も参加して学生主体のシンポジウムがある。))。

学生ボランティアは、参加者の入れ替わりが多く、長期継続的な活動は難しい。しかし、様々な立場、職歴、年齢の人達と協働する中で、一市民として社会との関わ

りを体験することは、たとえ短期であっても、成熟し自律した市民となる上で大事であろう。今後、本学のボランティア活動が継続し、また災害だけでなく、福祉等様々な方面に拡がって行く為には、学生自身によるボランティア組織が不可欠である。「何をしたらよいか」自分達で考えることがボランティア活動のスタートであるからだ。

学内には、新たにボランティアに関する講義科目を作ろうという動きもある。それも含めて、教育という立場から、この一年の経験を生かして行きたい。

現在のボランティア活動に関しては、「長岡技術科学大学の中越復興ボランティアブログ」<http://vol.nagaokaut.ac.jp/ppblog/ppblog/index.php>に整理している。これから冬に向かって、仮設住宅の雪かきや、住民の話を聞いたり等のボランティアのニーズが想定される。未だ1万人もの人が仮設住宅で暮らしている。地震災害は有ってはならないが、他の地域の大学に通っては体験できない学び場がここ中越にある。

1日でも1時間でもいい。気軽に出来る事から始めてみたらどうだろうか？



操車場仮設の雪かき

クラブ連絡会会長就任挨拶

生物機能工学課程 2年
和田 拓也
(日本文理高校出身)



はじめまして。新しくクラブ連絡会会長に就任いたしました和田です。まだ就任したばかりで不慣れなことも多く、戸惑ってばかりですが、皆さんよろしく願います。

クラブ連絡会(通称・クラ連)と言われても何をやって

いるか分からない方も多いと思います。私たちクラ連は、技大のサークルの予算配分や、大学の課外活動を活発にするため、運動会、球技大会等の運営という仕事をしています。つい先日、初仕事となる秋季球技大会を終えましたが、改めてこの仕事の大変さを思い知らされると同時に大きなやりがいも感じています。私たちクラ連は、皆さんの学校生活がより良いものになるよう精一杯努力していきたいと思っています。

現在、恒例行事である春季球技大会、長岡看護福祉専門学との合同運動会は来年も継続していく予定です。皆さん、学生行事には奮ってご参加ください。



全国トップクラスが競う 全日本レーザー大会で好成績!

電気電子情報工学課程 4年
八木谷 允
(米子高専出身)



11月3日～6日に長野県の野尻湖で全日本レーザー大会が行われました。本大会は、レーザー乗りの日本一を決める大会で、毎年、全国から数多くの人が集まってきます。レーザーとは、ヨットの一人乗り種目の中の一つで、オリンピックでも採用されている艇種です。

本大会では、11レース行うことができました。ヨットの大会は、全レースの合計得点で順位を競います。ヨットは、天候により状況が常に変わるためレースができない状況もあり、4日間で11レー

秋季球技大会

平成17年9月24日(土)

平成17年度秋季球技大会はソフトボール、フットサルの2種目が催されました。当日は台風が接近していたこともあり、ソフトボールの開催に不安がありましたが無事行うことができました。

ソフトボールには6チームが参加し、会場には楽しそうな笑い声が響いていました。試合形式は2リーグで総当たり戦を行い、それぞれのリーグの上位チーム同士で優勝決定戦、3位決定戦を行うというものでした。試合はハイレベルなもので、最後にはサヨナラ勝ちで優勝が決まりました。

フットサルには9チームが参加し、トーナメント戦が行われました。こちらも白熱した試合が繰り広げられ、安定した強さを見せた2チームが順当に勝ち上がりました。その2チームによる決勝戦は2-2で引き分け、PKまでもつれ込む接戦となりました。いずれの競技と

も全てのチームがベストを尽くす素晴らしい試合でした。

本来ならばバレーボールも開催される予定でしたが参加者不足のため中止という残念な結果となってしまいました。次回はより多くの方に参加し楽しんでいただけるよう、万全の準備をし、しっかりとした運営を目指しクラブ連絡会はよりいっそうの努力をしていきたいと思っています。

(和田拓也 クラブ連絡会会長)



白熱したフットサル



ハイレベルな戦いとなったソフトボール

技大祭を終えて

第25回技大祭実行委員会
委員長 小山 雄 生
(経営情報システム工学課程2年・長岡高専出身)



自分にとって委員長2年目となった、本年度の技大祭も無事に終わることができました。今年で25歳を迎えた技大祭のテーマは「rebirth」といたしまして、本学と近隣地域の交流の場となるような企画・運営を行いました。両日ともに晴天に恵まれ、多くのお客様にご来場いただくことができました。

今年の技大祭では、準備日の段階で退場者がでたり、前日の夜中まで揉めていたはずの「ハリガネロックライブ」が大盛り上がりしたりするなど驚きの連続でした。様々



大好評を得た「化学のおもちゃ箱」なハプニングを楽しみながら乗り切った技大祭だったと思います。

来年度の技大祭には、本学開学30周年ということで、今年以上の盛り上がりを目指します。

最後になりますが、今回の技大祭に様々な形で参加していただいた皆様、ご協力頂いた協賛企業及び、教職員の皆様には実行委員会一同、厚く御礼申し上げます。

スできたことは、かなり充実した大会であったと思います。

4日間を通じて風は不安定で、風を上手くとらえて走ることが難しく、かなりの苦戦を強いられました。結果は15位(46人中)でした。練習を十分にできなかったこともあり、満足のいく順位ではありませんでしたが、全国のトップレベルの人々とレースできたことはいい経験になったと思います。

今回は、ヨット部員、そして大学からのサポートのおかげでレースに参加することができました。今後は、練習量をもっと増やし、部員全員でさらに技量を向上させていきたいと思っています。



なんとか風をとらえて走る八木谷君

サークルリーダー研修会

～40名の学生が参加 11月12日(土)～

陸上部部長 谷澤 圭 佐
(材料開発工学課程2年・新津高校出身)



サークルリーダー研修会では、参加者がひとつのチームとしてさまざまな活動に取り組み、よいチームにするために自分はどうあるべきかを考えるという目的がありました。前半の活動では、多少ごちなさもありませんでしたが、午後の活動では徐々に打ち解け始め、全員で楽しみながら活動に取り組むことができました。この研修会で僕も含め、参加した全員の心に残ったのは、シットアップと呼ばれる動作を参加者全員で挑戦しやりとげたことでしょう。シットアップとは、他の人と手をつなぎ、円状になり、座った状態から立ち上がるという、単純なようで微妙な

バランスが必要とされる非常に難しい動作です。自分の意見を主張しつつ、他人のアイデアを取り入れるというように互いにアドバイスあいながら、やり方を改善していくことで、実に1時間以上かかりながらも、最後には達成することができたのです。短い時間でも同じ目標に向かって協力し合うことで、いつの間にかみんなの間に団結力が生まれていました。

この研修会で学んだのは、企業などの団体に所属してからも必要になるであろう、他者と積極的に意見を交換し、よりよいチームに成長させるための能力であると思います。



研修会の様子

受賞
新潟日報文化賞

コンクリート建造物の耐震設計技術の開発 および材料のリサイクル技術開発による地域貢献

新潟日報文化賞は、新潟日报社によって、新潟県の県勢伸長と県民生活の向上を目的として、昭和23年に制定され、産業技術、学術、芸術、社会活動の四部門での顕著な業績に対して与えられる名誉ある賞で、本学の丸山久一 理事・副学長が平成17年度の産業技術部門で受賞されました。その研究内容を以下に紹介して頂きました。



丸山久一
(理事・副学長)

今回の受賞は、表題にもありますように、技術開発を通して地域に貢献できたことに対するものであると思っています。コンクリート建造物の耐震性能に関する研究は大学院の頃に始めましたが、受賞の対象は、土木学会において、最新の耐震技術をまとめ、コンクリート標準示方書〔耐震性能照査編〕(2002年制定)として新しい体系を作ったことです。

勿論、私一人で行ったものではありません。私はリーダーとして、多くの人々の協力を得ながら進めただけです。ただ、この仕事を通して得られた知見が、昨年発生した新潟県中越地震からの復旧・復興に役立っていることは間違いありません。私自身も、国交省、新潟県、JR東日本、当時の日本道路公団(現在、東日本高速道路株式会社)など、各種の対策委員会に加わり、技術的な面から多少の貢献ができたと思っています。

この示方書の特徴は、実建造物の地震時の安全性を数値解析によるシミュレーションで直接確認するところにあります。これを可能としたのは、わが国において、耐震に関する各種の技術が大きく発展したことによります。特に、10年前の阪神大震災以降、コンクリート建造物の非線形挙動や破壊現象に関する研究が集中的になされ、高い技術レベルに達していたことが大きいです。

耐震性能照査技術の体系化のためには、それだけでは不十分で、コンクリート建造物の非線形挙動を追跡できる数値解析技術が開発されていること、地震動の発生および伝達メカニズムがある程度分かっていること、さらには、数多くの繰り返し計算を比較的短時間で実行できる高性能コンピュータが開発されていることが必須の条件でした。広範囲な領域での研究・技術レベルがある程度揃ったことにより、新しい示方書の体系化が可能となりました。この示方書の体系および示されている技術は、世界の最先端を行くものです。

もう一つの話は、私の研究室で地元の企業との共同研究により、ここ5～6年かけて開発した技術に関するものです。中越地区で産出されている産業副産物 - 還元スラグや鋳物灰 - をコンクリートの材料として使用するための配合設計法を開発し、具体的な適用例を示したものです。還元スラグおよび鋳物灰ともいくらかは路盤材料として使用されていますが、大部分は管理型処分場に捨てられていて、数年で処分場を埋め尽くすことが予想されています。その危機感から研究を始めました。

この研究では、2つの材料を同時に使用するところに鍵があります。還元スラグは膨張性が強く、これまではコンクリートの材料にならないとされていました。ところが、鋳物灰と同時に使用することで、膨張性を抑えることができました。さらに、還元スラグにはセメントからの六価クロムの溶出を抑える働きがあることも分かりました。

適用例として消波ブロックを試作し、海中に設置してその有効性を確かめました。新たな適用例として、法面保護のための吹きつけコンクリートへの応用も検討しています。



還元スラグと鋳物灰を大量に用いて製造したコンクリート製消波ブロック



中越地震で被災した上越新幹線の橋梁



耐震補強してあった上越新幹線の高架橋(妙見トンネル付近)は全く被害がなかった。

COE 報告

21世紀COEプログラム 15年度採択拠点の中間評価でAランク



河原 成元
(化学系 助教授)

グリーンエネルギーCOEプログラム (GE-COE) は21世紀COEプログラム15年度採択拠点の中間評価結果でAランクの荣誉に輝いた。これは、グリーンエネルギーのための要素技術の開発やアジアの研究拠点を形成して国際的に活躍できる研究者の養成をめざし、事業推進者が展開してきた積極的な国際活動が高く評価された快挙であり、プロジェクトリーダー原田教授(環境)のリーダーシップの賜物である。本年度に入ってから国際活動は活発であり、4月6日にはRajamangala工科大学と学术交流協定の締結、7月20、21日には塩見教授(材料・物質)が中心になって上海で華東理工大学とジョイントシンポジウムの共催および学术交流協定の締結、8月8、9日には佐藤教授(環境)とハイブリッドCOEプログラムが中心になってペナンでUniversiti Sains Malaysiaと第5回国際シンポジウムの共催および学术交流協定の締結を実施した。上海およびペナンでのシンポジウムでは、リーダー原田教授、サブリーダー福田教授(生物)、佐藤教授、塩見教授、梅田教授(材料・物質)、岡田助教授(生物)、政井助教授(生物)および河原が事業推進者として研究成果を紹介した。さらに、学生および卒業生の活躍も見逃せない。学会年次大会や国際シンポジウムにおいて画期的な研究成果を実直に報告する姿勢が好感を得て優秀発表賞や優秀ポスター賞が授与された。GE-COEは折返し点にきたが、今後益々事業を推進し、アジアを担う若い人材を育てていきたいと思う。



マレーシアでのCOE国際シンポジウム



宮下 幸雄
(機械系 助手)

8月7日～10日の間、マレーシア・ペナンにて、本学の2つの21世紀COEプログラム(ハイブリッド超機能材料創成と国際拠点形成、グリーンエネルギー革命による環境再生)の合同国際会議“The 3rd Workshop on Regional Network Formation for Enhancing Research and Education on Materials Engineering and Green Energy Revolution (The 7th International Symposium on The 21st Century COE International Symposium on “Creation of Hybridized Material with Super-function and Formation of International Research & Education Center” and “Global Renaissance by Green Energy Revolution”)が開催されました。同会議は、過去に、ベトナム・ハノイ、タイ・バンコクで開催されています。日本、マレーシア、ベトナム、タイ、シンガポール、インドネシア、フィリピンの7ヶ国から約100名が参加しました。

日本側からは、西口、石崎両副学長をはじめ、大学院生を含む、約50名が参加しました。オープニングセレモニーでは、本学とUniversiti Sains Malaysia間の学术交流協定に関する調印式も行われました。材料およびグリーンエネルギーに関連する研究発表があり、活発な討論が行われました。優秀ポスター発表の表彰も行われ、本学の学生も受賞しました。参加各国から積極的な協力が得られることになり、来年は6月にインドネシアで開催することになりました。



就職活動を経験して

松岡 遼子(富山高専 出身)
(生物機能工学専攻2年)

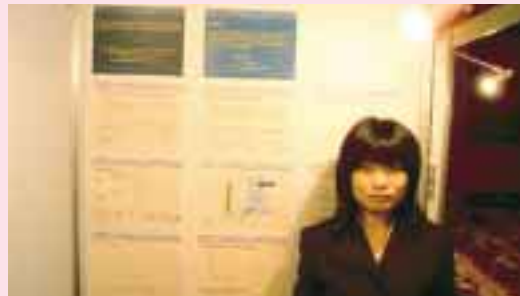
8月、就職サイトに登録した時から私の就職活動が始まりました。実際に企業を回ったのは12月からで、2～4月頃が一番忙しかった時期でした。主に、首都圏と地元である富山や新潟で活動し、最終的に、富山の企業から7月後半に内定を頂くことができました。

実際に就職活動をしてみて分かったことがあります。1つめは聞いていた以上にお金がかかりました。多くの場合、最終選考以外は交通費が支給されないのので、交通費だけでも結構な額が必要でした。具体的には、就活が集中した月では10万円近い出費になることもありました。2つめは、同じ日時に説明会や選考が重なる事も多いのですが、1日に複数回ると集中力が続かず悔いの残る結果になる場合が殆どでした。これは、友人談ですが、「いかに、効率よく企業を回るかが就活のおもしろさの一つ」だそうです。

就活で一番苦勞したことはモチベーションを維持することです。早い人でも数ヶ月、長い人だと1年近く就活をするので、その間モ

チベーションを維持するのは大切になります。選考に落ちて落ちこんだり、就活が忙しくて思うように研究が進まないとストレスがたまってして就職活動をする意欲がなくなることがあります。そういう時には、遊びに行ったり、思い切って活動を一週間休んだりして鋭気を養うことも大事だと思います。

最後に、これから就活をする人へ。就職活動を通して、様々な悩みや苦勞があると思いますが、就職は自分の将来を決める大きな分岐点の一つです。悔いが残らないように、頑張ってください！！



昨年の学会にて

実務訓練は就職の第一歩

王 悦(中国 出身)
(経営情報システム工学専攻2年)

日本IBM一社に絞って勝負した私の経験を皆さんにお話します。

実務訓練は、就職のためのものではなく大学院での研究の動機づけのためのものですが、経営情報一期生で留学生でもある私にとって、日本の企業活動を知る唯一の貴重な機会でした。IBMに派遣された私は、ITスキルやビジネス・スキル、プレゼンテーション・スキルなどあらゆる面で向上できたと同時に、企業文化をじかに感じ取り、人的ネットワークも築くことができました。

実務訓練で覚えたことを3回の面接でとことんまで活用しました。たとえば、1次面接で「IBMが今提唱しているビジネス・モデルはなんですか？」という質問に、「オンデマンド・ビジネス」と答えられたのは5人のうち、私だけでした。他の4人は他大学からの学生でした。

希望する就職先の企業理念、価値観に感銘

を持つことと、分かりやすくアピールする能力を備えることは大切だと思います。企業の価値観に合わせて、自分自身を徹底的に分析して、すでに持っているスキルと潜在的に持っているスキルとをどのように役立てたいのかななどを、論理的に分かりやすく説明できることが鍵だと思います。

最後に、「気後れしない、自信を持って臨む」という実務訓練中の上司の言葉を皆さんに贈ります。



キャンパスにて

総勢86名が 「外国人留学生等見学旅行」に参加!

去る8月17日から19日にかけて、愛知県で今年度の外国人留学生等見学旅行を実施しました。

この見学旅行は留学生に日本の文化・伝統・技術などの理解を深めてもらうとともに、日本人学生との交流を深めることを目的として毎年企画されているものです。今年は例年を大幅に上回る留学生等75名、日本人学生11名が参加し、愛・地球博の見学で最新のテクノロジーを体感し、またトヨタ及びINAXの工場見学を通じて日本の製造業についての理解を深めました。

2泊3日という短い時間ではありましたが、実際に第一線で活躍しておられる技大卒業生のお話を伺う機会もあり、有意義な時間となりました。



愛・地球博の会場にて



INAXの工場見学

平成17年度技術開発懇談会(第4回)を開催

地域社会との連携・交流を深め より積極的な技術開発等の推進に貢献

日時 平成17年10月25日(火)18:00~20:00

講師 機械系 教授 伊藤義郎

受講者の声

技術開発懇談会を受講して

株式会社片山抜型製作所
長岡事業所 山口 大志郎

去る10月25日、機械系伊藤義郎教授による「最近の加工用レーザーとそれによる加工」の講演を受講しました。私どもの会社では加工の一環としてレーザーを用いておりますが、昔ながらの切断加工が主で、近年利用され始めたレーザーについては聞いたことはあるという程度でしかなく、講演タイトルの「最近の加工用レーザー」という言葉につられて参加致しました。

講演では、レーザーの基礎から最新の技術まで事例を交えて説明して頂き、今後の技術開発に生かせる内容でした。また講演後の懇談会では、疑問点や現在抱えている問題点などを気軽に相談でき、また分野の違う方々と交流を深められたことが非常に有益でした。

今後も貴学が持つ様々な技術や研究結果を、お聞きする場を設けて頂きたいと願います。



懇談会の様子

八海山と里宮

小幡 松 二 (極限エネルギー密度工学研究センター 研究支援推進員)

長岡市から国道17号線を南へ走り、和南津トンネルを抜けると魚野川の右手向こうに越後三山の雄大な姿が眼前に迫ります。左から駒ヶ岳・中ノ岳・八海山と並んでいます。南魚沼市の旧大和町から見ますと霊峰八海山が中央にどしりと座り、後ろに駒ヶ岳・中ノ岳を従えた形になります。1778mの八海山は、三山の中で一番低いのですが、ハツ峰の鋭鋒と信仰で有名です。登山口には、それぞれ里宮があります。

北側から登る大倉口の里宮は、水無川の左岸にあり、9月下旬には自家製のおいしい栗おこわが並びます。水無川左岸一帯を八色が原と呼び、八色西瓜の産地です。水無川と言っても上流は豊富に水があり、遊歩道やキャンプ場もある越後三山森林公園になっています。森林公園から水無川渓谷に沿って40分ほど歩けば、滝の連なるオツルミズ沢、八海山が源流の高倉沢などの豪快な渓谷美を見ることができます。

中央登山口の大崎の里宮は八海山尊神社と言い、広い境内で十月に行われる火渡祭は、素足で火の上を歩くことで有名です。一般の人も参加できます。神社奥の水垢離をする場所の先にある奥の院の右手から修験者も登る登山道に入ります。ここから千本松小屋まで5時間、ハツ峰を越えて入道岳までもう1時間かかります。大崎は蕎麦もうまいのですが、魚沼の春を告げる大崎菜の産地でもあります。五月には、谷を渡る鯉幟が揚ります。



大倉の里宮

大崎から旧三国街道を南へ5 kmほど行くと八海山醸造所のある城内です。そこから八海山の麓に向かって更に4 km入った所に、城内の里宮八海山神社があります。ここの蕎麦は素朴ですが味わいがあります。神社の参道の鬱蒼とした杉並木は県指定文化財になっています。城内口の登山道は、屏風道、新開道の2ルートがあります。屏風道は、5合目からは鎖と梯子の連続する急登で大変なスリルが味わえ、八井先生のお気に入りのルートです。

八海山スキー場のゴンドラの終点から少し登ると標高1200mの八海山遥拝場があり、山々や魚沼一帯の素晴らしい眺望が開けています。遥拝場で大崎ルートの4合目と合流します。ここからは、千本松小屋まで2時間で登ることが出来ます。遥拝場から6合目の女人堂までは安全で快適な90分の軽登山が楽しめます。



大崎の里宮と火渡祭の会場



城内の里宮

編集後記

本号では、「法人化と開学30周年」及び「新潟県中越地震から一年」という二つの特集を組みました。昨年度は、長岡技大にとって、国立大学法人化が開始され、さらに、天災である地震とその後の大雪があった激動の一年でした。それから一年後の現況がどうなっているかを冷静に振り返り、熟慮してみたいものです。

来年度は、本学の開学30周年に当たります。今までの30年を概観し、本学の今後の姿はどうあるべきかを、やはり冷静に考えてみる必要があるのではないのでしょうか？

(編集委員)



2006年10月1日
開学30周年を迎えます。

VOS 130号 (平成17年11月)
編集発行 / 長岡技術科学大学広報委員会 (総務部 総務課)
* 本誌に対するご意見等は下記までお寄せください。
〒940 - 2188 長岡市上富岡町1603 - 1
Tel.0258 - 47 - 9209 Fax.0258 - 47 - 9000
E-mail skoho@jcom.nagaokaut.ac.jp
U R L : <http://www.nagaokaut.ac.jp/>

VOSの由来

本学のモットーである、Vitality Originality, Servicesの頭文字をとって 本学初代学長の故川上正光氏により名付けられました。